

13 近世藩立医育施設における西洋医学教育実施状況の分析

鈴木 友和

公立学校共済組合近畿中央病院

わが国の医学が明治以降急速に躍進を遂げることを可能にした主な要因として、江戸時代における医学教育が挙げられて久しい。しかし藩立医育施設が果たした役割を俯瞰的に調査・分析した研究は極めて少ない。本研究では18世紀後半から慶応3年迄の間に創設された藩立医育施設を対象に、まずその設立理念、次いで西洋医学（蘭方）受容状況を分析し、蘭方を導入した施設が31施設にのぼることを報告した。今回は蘭方を採用した施設における西洋医学教育実施状況を、使用された教科書を中心に据えて、調査することにした。

その結果、蘭方を導入した藩立医育施設の6割にあたる18施設で教科書に関する記述が残されていることを見出した。ただ厳密に教科書のみから成る目録資料は極めて限られるため、教官向けの参考書も含めた蔵書をカウントせざるを得ず、幕末維新の混乱期に蔵書やその目録を残す作業に尽力した人々に敬意を払いつつ集計を進めた。蔵書数は施設により大きな差異があり、所蔵部数が4以下の6施設は除外し、12部以上の蔵書が記録されている12施設（平均所蔵部数51）を分析対象とした。試みに蔵書を語学（辞典・文法書）、基礎医学、臨床医学、薬学、その他の5つに分類し、原書・和訳書別に集計すると、以下のような所見が得られた。一、語学書は1施設を除く全施設が保有し、1施設当たりの平均部数は11であった。また5施設で語学書の部数が総部数の2割を上回っていた。二、基礎医学書が相対的に多い傾向が見られた。基礎医学書の1施設当たりの平均所蔵部数は14で、8施設（3分の2）で基礎医学書の部数が臨床医学書のそれを上回っていた。また7施設で基礎医学書の部数が総部数の4分の1以上を占めていた。三、基礎医学書の内訳を見ると、解剖学・生理学・病理学と並び物理学・化学に関する書物が数多く所蔵されていた。物理学書・化学書を所蔵した施設は夫々11施設、9施設に及び、どちらも保有しない施設はなかった。四、原書の部数が和訳書より多い施設は6、全て原書の施設が2施設あった。次に教科書として原書が用いられた授業の状況に目を転じると、先決課題のオランダ語習得には様々の工夫が見られた。語学教育を入学前に教官の家塾で行う施設や習得を促進するため教官が自ら入門書を刊行した施設もあった。また学級を原書と訳書にクラス分けして授業する施設もあった。萩藩・好生館では「原書 西洋書之原文ニ就而習読科目也、初学は洋書之義理よりハ文法を研究すへし、猶醫書に限らず、窮理書其外習読不苦候、語辞暗記、文法會得之上は専ら醫書を研究し、事実を徴すへし」（嘉永3年・「沙汰」）と謳っている。教授法は従来の「講釈」主体から「会読」が主要な方法となり、教科書を規準にした学課程から学科目を設定して体系的に西洋医学を学ばせる施設が現れた（3施設）。

上述したように、藩立医育施設の蔵書には臨床医学書だけでなく基礎医学書も数多くあることに驚かされる。幕末の諸藩が藩政改革の中で西洋の諸術伝習の推進を掲げ、藩立医育施設にも「採長補短」で実益と結びつく医術の伝習・速成が求められたが、今回明らかになった状況はその政策にぴったり沿っているとは言えない。藩立医育施設としては蘭方の技術伝習だけでは飽き足らず、学術としての西洋医学に正面から向き合い、それを医生に効率よく伝えるために教授法の改革も試みたのであろう。藩立医育施設が示したこの見識はわが国の近代医学確立に向けた重要なマイルストーンになったと考えられる。